

「冎」について

はじめに

「冎」という文字は単独で使われることはほとんどない。「骨」の上
部だというと、ああなるほどと気づくだろう。「骨」は「月||肉月||肉」
がついている骨であるため、実際には「冎」こそが、本当の「骨」と
いうことになる。

「冎」は『説文解字』では部首だが、『康熙字典』では部首ではない。
『康熙字典』では「骨」が部首とされている。「冎」自体は「冎部四」
という部首に分類されている。

『説文解字』巻五の部首としての「冎」には「𠂔刑」と「𠂔脾」
がおさめられる。

「冎」は、

剔人肉置其骨也。象形。頭隆骨也。凡冎之屬皆从冎（人の肉を剔
（けず）りて其の骨を置くなり。象形。頭隆骨なり。凡そ冎の屬、
皆な冎に从う）。

大形徹

とみえる。

ここで許慎は頭隆骨と称しているが、文字学の研究者には、その見
解に異をとなえるものもある。そのことについては後述する。

「刑」は、

分解也。从冎从刀。憑列切。（分解なり。冎に从い刀に从う。憑
列の切）。

「脾」は、

剔也。从冎卑聲、讀若罷。府移切。（剔（わか）つなり。冎に从
い卑聲。讀みて罷の若（ごと）し。府移の切）。

とされている。

「冎」の説明に「剔人肉」とみえる。「剔」は削るという意味だが、「冎」
の形には、その意味を見いだしがたい。これは「刑」の説明である「分
解也。从冎从刀」によって「冎」を説明したのである。「人肉」と

あるため、これは人である。また「頭隆骨」とあるため、頭骨なのでろう。白川静は「頭や胸の骨の形」^{〔1〕}と、頭骨だけでなく胸の骨と解釈している。これについても後述する。

部首としてはそうなるのだが、この文字を構成要素とするものは他にもある。それらには、精神や霊（タマシイ）的なものと結びつくものがある。つまり精神的なもの、一般に目に見えないと考えられているものを文字で表現しているのである。

たとえば「冎」に「口」がつくと、「冎」（説文冎、甲骨𠄎、その他𠄎^{〔2〕}）となり、さらに「示」がつくと「禍」（説文禍、甲骨𠄎^{〔3〕}、その他𠄎^{〔3〕}）となる。これは「わざわい」という意味になる。

六書という分類法がある。「象形・指事・会意・形声・転注・仮借」である。「冎」は「冎」と「口」の会意。「禍」は「示」と「冎」の形声であり、六書の中でこれらの文字の説明はつく。

「象形」という形を象（かたど）った文字という分類はある。白川静は、「象形」を「絵画的な方法」と述べ、『説文解字叙』の「象形なる者は、其の物を畫成し、體に隨つて詰諷（きつくつ）す。日月、是れなり」^{〔5〕}を引用している。

それでは形のないものについてはどうなのだろう。さきに述べたように精神や霊に関する文字は多くある。それらは形のないものである。形のあるものと、ないものという分類もまた可能ではないだろうか。

象形が形のあるものを示すとすれば、すでにその時点で実際には形のないものは分類されているはずである。象形以外のものという分類である。けれども、六書という分類には、そのような項目はない。項

目がないため、形のないものについては、これまで、ほとんど注目されることがなかったように思われる。

拙稿では、そのような、形のないものに関する文字、そのなかでもとくに精神や霊に関する文字がどのような構造になっているのか、なぜそれがそうだとわかるのかといったことについて、「冎」という文字とその派生形の文字を例にとり、簡単に提示してみたい。

1、「冎」についての先行研究

「冎」についての先行研究には以下のものがあげられる。陳夢家「釋冎」（考古社刊 第五期）、郭沫若（『殷契粹編考釈』）、馬叙倫（『説文解字六書疏証』）、李孝定（『甲骨文字集釋』第四）、于省吾「釋冎」『甲骨文字釋林』、徐中舒『甲骨文字典』巻四、丁驥『東薇堂讀契記』中国文字新十二期がある。

それぞれの説明はかなり長い。そのため、ここでは拙稿の関心にあう部分のみを摘録して紹介する。

著者	書名・論文名	内容(摘録)	備考
許慎	『説文解字』巻五	人の肉を剔（けず）りて其の骨を置くなり。象形。頭隆骨なり。凡そ冎の屬、皆な冎に从う。	人の頭隆骨。これは頭蓋骨の上部をさすと思われが、きちんとした説明はない。

郭沫若	陳夢家
『殷契粹編考 積』	「釋𠃉」考古 社刊 第五 期
<p>上の述ぶる所を總ぶるに、卜辭の𠃉は卜骨の形を象り、讀みて咎の若くす、故に同音假借して咎と為す。孳乳して過と為り禍と為り、義符の肉を加えて骨と為り肯と為り、又た孳乳して禍と為り鍋と為り、器の名と為る。</p> <p>：後ち骨白刻辭に「四₁出₁𠃉」の一例を得、林二・卅・一二。𠃉を釋して𠃉と為して謂えらく即ち骨窠と。𠃉は即ち此れ₂𠃉字の草率なる者、其の字、簡畧して之れを出だせば、則ち₃𠃉の諸形と為り、因りて疑うらくは、凡そ卜辭の「亡₄𠃉」の字、均しく是れ「亡₄𠃉」、讀みて、禍無きか、と為す、但だ苦だ確證無し。今、本片を得、此れ疑うらくは乃ち断然、證實なり。⁽⁸⁾</p>	<p>上の述ぶる所を總ぶるに、卜辭の𠃉は卜骨の形を象り、讀みて咎の若くす、故に同音假借して咎と為す。孳乳して過と為り禍と為り、義符の肉を加えて骨と為り肯と為り、又た孳乳して禍と為り鍋と為り、器の名と為る。</p>
<p>※骨窠。 𠃉 𠃉 𠃉</p>	<p>※卜骨の形。過・禍などになる。</p>

李孝定	馬叙倫
『甲骨文字集 釋』第四	『說文解字六 書疏証』
<p>之れを綜ぶるに、卜辭の諸₁𠃉字、釋して𠃉骨と為し、讀みて禍と為す。諸辭に於いて均しく通ず可し。讀みて₂固₂の二字に至らば、則ち𠃉に从うの字と為し、當に占と釋すべし。𠃉と𠃉の若く、一字に非ざるなり。⁽⁹⁾</p>	<p>饒炯曰く、𠃉は即ち骨の象形の 本字なり。形顯らかならざるに 因りて、乃ち肉を加えて以て之 れを箸（あきら）かにするなり。 唐蘭曰く、過伯殷の復は即ち過 なり。走に従う。𠃉に従う。𠃉 は即ち𠃉なり。魚七₃𠃉字の従う 所の₄𠃉は即ち骨の字。卜辭之₅𠃉 は即ち𠃉の字。倫按ずるに饒・ 唐の二説、是なり。初文の骨の字、 象形、₆𠃉に作るに本づく。此れ 上の₇𠃉、骨の端₇𠃉處に象るな り。金甲文は則₈𠃉、兩端の₈𠃉 に象るなり。說解本、骨に作る なり。今を以て古を釋す。校者 知らざれば、則ち人肉を別り其 の骨を置くを以て之れを説く。 後世、剛刑有る自りの外、寧ん ぞ此の忍き事有らんや。頭隆骨 也も亦た校語なり。⁽⁹⁾</p>
<p>※𠃉には「禍」と解 積できる場 合と「占」 と解積でき る場合があ る。</p>	<p>※骨の象形 の本字。</p>

于省吾	「釋𠂔」『甲 骨文字釋 林』
<p>之れを總ぶるに、前文既に𠂔の骨字の初文、骨架相い支撐うるの形を象り、其の左右の小さき豎劃は骨節轉折の處、突出する形を象り、後來、𠂔の字、孳乳して骨と為り、遂に肉に从い𠂔聲の形聲字と成爲るを闡明せり。これ就ち説文の誤解を糾正せり。商代金文中の舊と識らざる所の𠂔字、古文字、横列豎列往往にして別無きを以て之れを證するに至りては、疑い無く、它もまた是れ𠂔字の古文なり。古文字中の𠂔と𠂔に从うの字、既然に常見すれば、則ち甲骨文の𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔等の字、舊と釋して禍𠂔或いは骨と爲し、又た述或いは𠂔を釋して過と爲すは、都て是れ主觀臆測、毫も根據無きものなり。¹¹⁾</p>	<p>※(人の)骨架が支える形、左右の小さな縦画は関節。※禍、𠂔、骨などとすゝるのは主觀臆測。</p>

丁驢	徐中舒 『甲骨文字 典』卷四、
『東薇堂說契 記』中國文 字新十二期	<p>〔解字〕𠂔はト用の牛の肩胛骨の形を象る、即ち《説文》𠂔字の初形、上部の𠂔、骨臼之下凹を象り、下部の𠂔は牛の肩胛骨の上歛まり下侈きの形を象る、又たト骨整治せし時、骨臼の一侧に於いて、鋸もて一直角形の骨塊を去る、故に復た骨版上部骨臼の旁に於いて特別にし形の缺口を描繪して𠂔形を作る。甲骨文の𠂔或いは又た𠂔に作るは、乃ち𠂔の形の簡化に由りて𠂔と爲り、進みて簡化して𠂔、𠂔の形と爲る。</p> <p>一、用て骨に作る(例文 省略) 二、讀みて禍の如し(例文 省略) 三、人名(例文 省略)¹²⁾</p>
<p>：此れ牛胛骨轉倒の形なり。此の字の隸は𠂔、實に骨の形なり。¹³⁾</p>	<p>※占いに用いる牛の肩胛骨。鋸で整形した形。</p>
<p>※牛の肩胛骨をひっくりかえした形。</p>	

劉志基	『中国漢字文物大系』 文字の写真	甲骨文は骨架の形に象る、当に“骨”字の初文と為すべし。後世“𠂔”字罕に見ゆるは、當に“骨”の字、已に有るに因るが故なり。	(人の)骨架の形。𠂔版をみれば、頭骨ではない。
白川静	『字通』 ※𠂔の甲骨・金文の例はあげていない。 ※𠂔については甲骨・金文俱	「象形」頭や胸の骨の形。「説文」四下に「人の肉を剔りて其の骨を置くなり。象形。頭隆骨なり」という。「列子、湯問」に炎人の国の話として、親が死ぬと「其の肉を𠂔りて之れを棄つ」とあり、複葬の俗をいう。卜辞に「犬を𠂔らんか」のように、犬牲の法を卜するものがある。𠂔に祝禱の器である𠂔を加えたものは𠂔。禍(禍)の初文である。 〔訓義〕 1. わける、けずる、とく。 2. わざわい。	※人の頭隆骨。 ※𠂔は複葬で肉をけずること。

説はさまざまである。大きく分けると①人骨 ②獣骨に分かれる。①人骨はさらに、a頭隆骨 b骨架に分かれる。②獣骨は牛の肩胛骨である。それを簡単な表にすると以下のようになる。

獣骨	人骨		骨
	牛の肩胛骨	骨架	
	陳夢家・郭沫若・馬叙倫・徐中舒・丁驥	于省吾・劉志基	許慎・白川静
			部位
			学者

『説文解字』は頭隆骨だという。この言い方は、『説文解字』に始まるもので、その後の文献も、これを踏襲したものしかあらわれない。医学的には「外後頭隆起」のことかもしれない。また第七頸椎のことを「隆椎」という。この部分だけが隆起しているからである。けれどもそれに相当するかどうかは不明である。

于省吾や劉志基のあげるものは人の骨架の形だとする。要するに骨と骨がつながる様子だという。于省吾は関節にあたる部分まで指摘している。この場合、頭骨ではなく身体の骨であろう。ただし、手足あるいは肋骨などに特定できるかという点、どうもそのようでもない。白川静の『字通』は、この形と他の形をともに「𠂔」としてあげている。しかし、この形の説明はない。白川静は親が死んだときに肉を削り取る習俗をあげる。人骨を祖先のものともみなすようである。

一方、獣骨の方は、牛の肩胛骨とみなしているようである。骨臼部分をノコギリで切り取って整治しているという。牛の肩胛骨は占いに使用されるために、この解釈は占いの内容と関連することになる。人骨で占う例はあり、とくに頭骨で占った例はあるものの、それは特殊な例であり、一般的なものとはいえない。

二、「死」という文字について²¹

「死」という文字は「冎」と関連する。「死」の文字の部首である「歹(冎)」は『説文解字』四下に、「列骨の残なり。半冎に从う」とされる。つまり、「歹(冎)」は、「半冎」すなわち「冎」の半分ということになり、残骨ということになる。

そこで「死」の甲骨文の形をみてみると、甲骨文として「・」²²、金文として「・」などがあげられている。²³
 「歹(冎)」は人が残骨に拝礼している様子である。残骨をあらわす部分の上部は「卜」にもみえるが、これを「卜」とみなすものはない。もし「卜」だとすれば骨と占卜の関係を考察する上のヒントになるかもしれない。

徐仲舒『甲骨文字典』は「死(冎)」について、

人、朽骨の旁に拝するを象り、以て死の義に會す²⁴。

とする。

朽ちた骨つまり骨を拜んでいる様子である。他の字形をみても

「」²⁵は傍らの人が側身形で立っている様子で、「」²⁶は尸のよう
 うにみえ、また「」²⁷は跪いているようにみえる。これらの残骨は当然、人骨であろう。

白川静『字通』「死」は「冎」は人の残骨の象。人はその残骨を拜し
 申う人²⁸と説明する。徐仲舒にはなかった「申う」の語が入っている。

「骨」に死者の靈魂が憑りついていなければ、骨を拜し申う意味はないだろう。甲骨文の時代には、骨と靈魂が一体のものと考えられていたことがわかる。

『莊子』至樂の「莊子、楚に之きて、空髑髏を見る。：髑髏を援きて枕して臥す。夜半、髑髏、夢に見われて曰く、「子の談ずること辯士の似し。」」²⁹は、路傍に転がる頭蓋骨を枕に眠ったため、夢に死者(髑髏)の魂が現れたという話である。これは死者が骨になったあとも、その靈魂がよりつくという話である。その淵源が殷の時代からあったということがわかる。

三、冎・禍・過

「冎」の下に「冎」のついたものが「冎」である。「冎」は白川静は「さい」と説明する。徐仲舒は「人所以言食也、象形(人の言い食らう所以なり、象形)」と「口」という理解だが、口以外に「人名・災禍」という意味があるとしている。

冎

白川静は、「冎」について、「字訓」「わざわざい」としている。文字としては、甲骨「」³⁰としている。これは「冎」と同じである。

「会意」として、

冎(か) + 口。冎は人の上体の残骨の象。口は冎(さい)、祝禱
 を取める器の形。その死霊の呪能によって、人に呪詛する意で、

これによって禍殃を与える。「説文」二上に「口戻りて正しからざるなり」とあり、禍(禍)の初文

とみえる。

なぜ残骨で呪詛が行えるのかについては、骨と靈魂の関係をベースにすればわかりやすいであろう。また「𣦵」は「禍」の初文としている。「禍」は「わざわい」である。

禍

「禍」については、「字訓」「わざわい・とがめ」とした上で、甲骨として「慌」、金文としては「抗」をあげる。そして、

【形声】 声符は𣦵(か)。𣦵は残骨を用いて呪詛を行う意。それによってもたらされるものを禍という。「説文」一上に「害なり」、「積名、積言語」に「毀なり」という。毀も残骨を毀(う)って呪詛する意。字はまた既を作る。

という。

『釋名』の原文は、漢劉熙撰『釋名』卷四、釋言語「禍は毀なり。毀ち滅するを言うなり」⁽³⁰⁾である。ここでは「毀なり」というとした上で、「毀も残骨を毀(う)って呪詛する意。字はまた既を作る」と述べる。

あわせて、「毀」について白川静の『字通』を考察すると、

【会意】 皇+𣦵(しゆ)。皇は「説文」古文の字形によると白(きゆう)と王(てい)の形。すなわち兒(児)が挺して立つ形。これに𣦵を加えて毀(う)つ意の字である。「説文」に字を土部十三下に属し、「缺くなり」と訓して、土器の類を毀損する意とするが、その字形は𣦵(のう)の縫合部のある幼児を毀損する意で、おそらく犠牲の方法を示す字であろう。殷墓の殉葬者のうち、多数の幼童、未成年者の残骨がある。「周礼、地官、牧人」「凡そ外祭毀事には、彪(むくいぬ)を用ふるも可なり」の「杜子春注」に、「毀とは副辜候禴、殃咎を毀除するの屬を謂ふ」とあって、犠牲を用いる祓禴の儀礼であるが、毀では異族の幼童のものをを用いることがあったのであろう。毀はまさにその字であり、また焚殺することを燬といったものと思われる。

とある。

『周禮』の杜子春の注にある「毀とは副辜候禴、殃咎を毀除するの屬を謂ふ」⁽³¹⁾は、本来、犠牲を用いる祓禴の儀礼である。それを「殷墓の殉葬者のうちに、多数の幼童、未成年者の残骨がある」ことから、「毀では異族の幼童のものをを用いることがあったのであろう」とする。白骨に対するものとしては、白川静は「敷」の例をあげている。「放は架屍を毀(う)つ形。その架屍に頭の存する形が敷であるから、鼻に支を加える形である。放は架屍を毀(う)つ追放の儀礼。その呪霊

を向して呪詛する行為をいう」としている。
いずれも人の骨に関わる文字であるといえる。

過

「字訓」すぎる・よぎる・あやまち」とする。甲骨の字形はなく、
金文「𠄎・𠄏」の形をあげる。

「形声」声符は冎(か)。「説文」二下に「度(わた)るなり」と
度越・通過の意とする。冎は残骨の上半に、祝祷を収める器(口、
𠄎(さい))の形を加え、呪詛を加える呪儀。特定の要所を通過
するとき、そのような祓いの儀礼をしたのであろう。

とする。

「冎は残骨の上半に、祝祷を収める器(口、𠄎(さい))の形を加え、
呪詛を加える呪儀」という。ここもまた呪詛という解釈であり、また
残骨である。

この「過」には、「参考」とあり、

春秋期の金文「𠄎(ちゅ) 大宰鐘」に「用(もつ)て眉壽(めいじう)を過
(い)の(る)」という用法がある。金文に多く見える「𠄎(い)の(る)」
も人骨の呪霊を用いる呪儀。国語の「すぐ」は「すがし」と同根
の語と思われ、修祓によって心の清まる意。「あやまち」は「霊(あ
や)」のはたらきをいい、呪儀による禍殃を意味する。

とみえる。

ここも人骨と関わる。また「あやまち」は、日本語として、「霊(あ
や)」と関連するといいい、呪儀による禍殃を意味するという。

さらに𠄎について、考察すれば、

「会意」𠄎(ほう) + 𠄎(亡)。ともに人骨の象。これを呪霊とし
て祈り求める意。

とみえる。

ここもまた人骨に関連している。

おわりに

拙稿では「冎」という文字とその派生形の文字を例にとって、形
のないものに関する文字、とくに精神や霊に関する文字がどのような構
造になっているのかを考察した。一では「冎」についての先行研究を
整理した。諸説紛糾しているが、人骨とみる場合、獣骨とみる場合に
大きく分かれた。人骨の場合は、頭か身体の骨格かに分かれる。獣骨
は牛の肩胛骨である。大きくみれば「骨」である。人骨であれば、そ
こに死者の霊魂が憑りつくという概念がベースとして存在している事
に気づく。牛の肩胛骨であってもそれは占卜用であり、そこに神ある
いは祖霊の意思があらわれるということが前提となっているおもわれ
る。いずれもたんなる物質としての骨ではないだろう。

二では「死」という文字について考察した。「死」という文字の「歹」の部分は「半冎」とされる。残骨だという。その横には側身形の「人」が配され、跪坐しているものもある。人が残骨に拝礼している様子にみえる。「歹」の上部には、占卜の「卜」にみえる形が描かれているが、それを占卜の卜だとする説明はない。しかし、「半冎」の上には「卜」が配され、「冎」の下には「口」が配されて「冎」となるとも考えられる。「卜」と「口」は「占」の構成要素であり、いずれも占卜に関連するとみることできるかもしれない。

三では冎・禍・過などの冎から孳乳、つまり派生してあらわれる文字について考察した。「冎」は『説文解字』の部首であるが、そこにおさめられる文字は³⁴⁾冎の二つのみである。冎・禍・過はいずれも別の部首である。複数の部首に重複して分類するという考え方はない。冎・禍・過などは「冎」の部首には分類されないため、文字の流れを考察する場合は孳乳の概念をもちいることが有効であろう。白川静は、「冎」を「わざわい」、「禍」を「わざわい・とがめ」、「過」を「あやまち」と訓じている。またその説明に「冎は残骨の上半に、祝禱を収める器（口、冎さい）の形を加え、呪詛を加える呪儀」と述べている。ここで「残骨」という「骨」に関わって「呪」という概念が展開されていることに気づく。「骨」には、たんなる物質ではなく、そこに死者の靈魂がよりつく。その前提のもとで、呪詛が行われるということになる。文字の構造としてみた場合、「冎」は、骨の象形の「冎」に器あるいは口の象形の「冎さい」あるいは「口」の組み合わせである。「禍」ではさらに「示」がつき、「過」では「辵」(しん)がつけられる。

がつく。「示」は「神を祭る祭卓³⁵⁾」というテーブルであり、象形である。「辵」は、「会意」イ(てき) + 止(し)。イは小径、止は趾(あし)、歩行する意³⁴⁾と会意であるが、その構成要素「イ(てき)」「止(し)」まで分解すると象形となる。ただし、これはいずれの漢字においてもそうであろう。

ここでとりあげた「わざわい・とがめ・あやまち」などの形のない文字も構成要素を細かく分解すれば、それぞれが象形文字ということになる。つまり、形のないものを意味する文字も、形のあるもの組み合わせで作ることができるのである。

しかしながら、今回とりあげた「わざわい・とがめ・あやまち」と読める文字のもとには、「冎」という文字があり、それは「骨」である。上述したようにその解釈は人骨と獣骨に分かれる。しかし、いずれにしても、そこに靈魂が憑りつくことによって宗教的な意味が生じるという確たる認識がある。換言すれば、文字以前に靈魂が憑りつくという認識がなければ、そのような文字は作られるはずもないということである。その認識のもとで、象形と象形の組み合わせによって、つまり、形のあるもの同士を組み合わせる事によって、形のないもの文字を生み出しているといえるのである。

注

- (1) 『字通』、平凡社、一九八九、一〇九頁。甲骨文などの字体はCD-ROM版より(以下同じ)。
- (2) 同右。
- (3) 同、一一七頁。

- (31) 毀謂黷候禳毀除殃咎之屬
(32) 前掲『字通』三三〇頁。
(33) 前掲『字通』六七七頁。
(34) 前掲『字通』一〇八五頁。

(大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授・
立命館大学衣笠総合研究機構客員教授)

